

主 題：喜びと感謝の心をもって

聖書箇所：詩篇 100篇

テーマ：心からの喜びと感謝をもって神様に礼拝を捧げること

今朝、皆さんとともに学びたいみことばは詩篇100編になります。今回なぜ詩篇100篇を見ていくのかと言うと、今年度最後の日曜日に心からの喜びと感謝を持って神様に礼拝を捧げることがどういふことかを改めて皆さんと考えたいからです。きょうは週報の中にもさまざまな方々の感謝が、また第二礼拝の後にも感謝報告会があります。私たちが1年を振り返ってみれば、それぞれの生活の中に数多くのことがあったことだと思います。うれしいことや楽しかったこともある一方で、チャレンジだったこと、辛かったことや悲しかったこと、苦しかったことなど、いろいろな難しさを覚えたことだと思います。コロナがあっただけでなく、病気を患って入院や手術をしたり、健康面で不安や難しさを覚えた方々がおられるでしょう。学校や職場での責任やプレッシャーに追われたり、先が見えないことに焦りや不安を抱いた方がおられるかもしれません。周りに神様を知っている者がいない環境の中で、信仰の戦いを経験されたという方もおられるでしょうし、父、夫として家庭でリーダーシップを発揮すること、妻、母として夫に仕え、子育てに奮闘すること、そういった中で難しさを覚えた方がおられるかもしれません。サタンの誘惑や罪との戦いを経験し、何度も自分の信仰が試される機会を持たれた方もおられるでしょう。こうして振り返って見れば、置かれている状況が余りにも辛くて、余りにも悲しくて、苦しくて涙を流す日もあったと思います。

この1年を振り返ってみて、そんなさまざまなことを経験したのですが、私たちは神様に心からの喜びと感謝を捧げる者として歩み続けることができたでしょうか？私たちの立ててきたあかしは主への賛美に満ちあふれたものだったでしょうか？それとも感謝を忘れ、すぐに不平不満を口にしてしまうような者だったでしょうか？みことばを愛されている皆さんは、間違いなく聖書の中にこんな命令が記されていることをご存じです。「いつも喜んでいなさい。……すべての事について、感謝しなさい。」(1テサロニケ5:16、18)と。私たちはそのようなみことばをよく知っていますが、時にこんな考えが頭の中をよぎったことがなかったでしょうか？聖書はいつも喜んでいて、どんなことにおいても感謝することが大切だと教えていることはわかっている。実際ことばで言うのは簡単だけれども、実生活の中ではそんなにうまくはいかない、こんな苦しみの中に置かれれば、誰だって感謝などできない、きっと神様もわかってくださるだろうと。こうして私たちは、いつも喜んでいて、神様にすべてのことを感謝することにおいて難しさを感じてしまうことがあります。味わっている痛みが辛ければ辛いほど、経験している出来事が理不尽であればあるほど、いつまでも祈りが聞かれなければ聞かれぬほど、たとえ口ではありがたうと言っていたとしても、主に対する感謝が心の中から失われていってしまうことを私たちは経験します。

では私たちはどうすれば喜んで主に心からの礼拝を捧げる者として成長し続けることができるのでしょうか？どうすれば状況に左右されることなく、神様にいつも心からの感謝を捧げる者として成長することができるのでしょうか？みことばはその答えを私たちに教えてくれています。聖書の中に出てきたさまざまな登場人物たちを思い出してください。1日にして自分の愛する家族も持てる財産も、何もかも失ったヨブは「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかきこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」(ヨブ1:21)と叫んでいました。また、ダビデも敵に苦しめられ、悩まされ、死を覚悟するほどの困難の中で「私は心を尽くして主に感謝します。」(詩篇9:1)と言っていました。そして誰よりも迫害に遭い、キリストの福音のために多くの試練に直面したパウロも「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」(ピリピ4:4)と言っていました。彼らも私たちと何ら変わることはない罪人のひとりでした。しかし、彼らは涙を流し、苦しみや悲しみを口にすることはあったとしても、喜びや悲しみを失って、不満や恐れ、そういった失意に心が支配されるようなことはありませんでした。彼らはどんな状況にあったとしても、愛する主を覚え、この主に心からの礼拝を捧げる、そんな者として生きて行こうとしていたのです。

兄弟姉妹の皆さん、私たちもこのようにして生きて行くことができます。いや、私たちはこの不満と不平にあふれている、キリストにある本当の満足を知らないこの世の中であって、喜びと感謝にあふれた礼拝者として、生きたあかしを立てていくという責任を持っているのです。罪赦され、キリストのうちに新しくされた私たちが神様を知らないこの世の人々と同じように、失望や怒りに支配されたまま生きてはいけぬ。そんなことを言われても、どうすれば私たちはそのような喜びと感謝にあふれた者として成

長し続けることができるのでしょうか？きょうはそのことをこの詩篇100篇から学んでいきたいと思えます。

詩篇100篇 感謝の賛歌

:1 全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。

:2 喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。

:3 知れ。主こそ神。主が、私たちが造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。

:4 感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。

:5 主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。

さて、この詩篇の中に、大きく二つの礼拝者の姿を私たちは見ることができます。一つは喜びにあふれた礼拝者、二つ目は感謝にあふれた礼拝者です。そしてこれらの姿こそ、神様が私たちに命じておられる礼拝者、私たちが日々の生活の中であってどんな時も目指していく模範になります。

1. 喜びにあふれた礼拝者 1-3節

1) 喜びにあふれた態度で 1節

1節は「全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ」ということばで始まっていました。要するにこの地上に住むすべての人々が主に向かって喜びの声をあげるようにと記されているのです。ここで特に注目していただきたいことばは「声をあげよ」です。これは戦いでかちどきをあげるとか勝利の角笛を鳴らすといった意味で用いられることもありますし、また特に民の前に王が現われた時、王を迎える人々の喜びの叫びを表現するために用いられています。ことばだけ聞いてもなかなか想像できないかもしれませんので、実際にこれがどのようなものなのか、一つの例を挙げるとするならば、エルサレムに入城されたイエス様のことを思い出してみてください。その時の人々の様子がマタイ21:9に「そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言って叫んでいた。『ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に。』」と記されていました。確かにこう叫んでいた群衆の多くは、イエス様が本当は何のためにこの地上に来られたのかわかっていませんでした。イエス様が自分たちが苦しんでいるローマの圧政から救い出してくれると期待し、彼らは喜んでいました。しかし、イエス様が来られたのはローマを滅ぼすためではなく、罪と死に勝利し、人に救いをもたらすためでした。確かに彼らの理解は間違っていました。彼らの態度はこの主に対して王を迎えるのにふさわしい喜びの歓声だったのです。想像できますよね？苦しんでいた人たちがそこから救い出してくれると期待する王がやって来るところに出て行って、この方こそが私たちに救い出してくれる王なのだ、やっと私たちは苦しみから解放されるのだ、こんな素晴らしい方が私たちとともにいてくださることに人々は歓声をあげていたのです。どう考えても、すごいにぎやかだったと思いませんか？多くの人たちは喜びにあふれ、この主に対して賛美を捧げていたのです。

「全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ」、すべての人よ、この主に向かって喜びの歓声をあげよ。私たちが主を礼拝する時、一体どのような態度でこの主をほめたたえているのでしょうか？皆さんはこの主のすばらしさを知っています。この主がヤハウェであり、すべてを支配されている決して変わらない王の王であること、まことの神であることをよくご存じです。だとしたら、そんな私たちが捧げる礼拝はどんなものなのでしょうか？私の神は本当に偉大で最高のお方だ、そんな心からの喜びを表わすものなのでしょうか？私たちの捧げる礼拝は上辺だけ、単に形だけこなして気持ちの一切ない、そんな冷たいものであってはいけません。礼拝には来ているけれども、そこに私の思いや感情が一切ないというようなものであってはいけません。私たちの礼拝はどんな時も心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして唯一の神である、王である主に喜びに満ちあふれたものでなければいけません。私たちの礼拝はそのような喜びにあふれたものなのでしょうか？

2) 喜びをもって主に仕える 2節

また2節を見てください。続けてこう書かれていました。「喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ」と。ここで「仕えよ」ということばが用いられていますが、これはことばどおり喜んでみずからのすべてを差し出して奴隷として仕えるといった意味だけでなく、単に公の場で主を礼拝するといった意味を持っています。ここでどちらの意味を取ったとしても、言われていることは明白です。私たちは喜びを持って主を迎え、喜びを持って主に仕え、喜びを持ってこの方が受けるにふさわしい賛美をいつも捧げていなさいということです。主のすばらしさを知っている者、自分が愛し従っている王が自分たちといつともにおられることを知っている者は、何を犠牲にしたとしても、この方を喜ばせたい、この方に仕えたいと願っていつも生きていくはず。だからクリスチャンにとって礼拝生活というのは日曜日だけのものではないのです。私たちの神様は日曜に教会に行けば会えて、それ以外の6日間は私たちから遠く離れてどこかに行ってしまうようなお方ではありません。聖書が私たちに教えるのは、私たちの神は不変のお方で、遍在のお方です。日々の生活の中で、物事が順調に進んでいる時も、受け入れられないような苦

痛が降りかかってきた時も、一見もう希望が見えないような暗闇にひとり取り残されたと感じる時も、主は私たちとともにいてくださり、私たちのことを守り導いてくださる。そんな力強い主が、力強い王がともにいてくださっている。だとしたら、私たちは喜んでこの主に仕え、この方を賛美したいという思いが心の中からわき上がってこないでしょうか？

私の置かれている状況は確かに私の手でどうすることもできない。でも心配しなくていい。愛する神がいつも私とともにいて、私のことを守り導いてくださる。だから私は日々この方のために喜んですべてを捧げて生きていこう。主が私たちとともにいてくださる、だから私はこの方を喜ばせたいのだと。私たちが喜びにあふれた礼拝者として歩いていくことができるのは、私たちが困難に全く遭わないからでも、また私たちのうちにどんな問題も解決する力があるからでもありません。私たちが喜びにあふれた礼拝者として生きて行くことができるのは、ただすべてを支配されている主が、その王が私たちとともにいるからです。どんな問題に直面したとしても、私たちに必要な助けを主が備えていてくださる。そう私たちが確信できるからこそ私たちはいつも喜びを持って歩いて行くことができるのです。思い返してみれば、いつも喜んでいなさいと命令したパウロも同じピリピ4：12-13で「私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」と言っていました。私たちにあって何よりも大切なことは、どんな時もこの主の臨在を覚え、この主に信頼して歩むことです。ここに私たちの喜びの源があるのです。

さて、主はこうして私たちが主に向かって心からの礼拝を捧げるようにと命じておられました。どんな時も偉大な主を見上げ、心からの礼拝を捧げること、心からの賛美を主に歌い続けることこそが私たちが立て上げていくべきあかしです。私たちは普段の生活の中であって、そのようなあかしを立てることができているのでしょうか？先週を振り返ってみてください。皆さんの先週の歩みは主に対する感謝にあふれたものだったのでしょうか？主に対する喜びにあふれたものだったのでしょうか？先月を振り返ってみてください。先月の皆さんの歩みは主に喜ばれるものだったのでしょうか？この1年を振り返ってみてください。私たちの歩みはいつも主にあって喜びを持った歩みだったのでしょうか？恐らく私たちが正直になれば、私たちは皆このような歩みをして行きたいと強く願いながらも、難しさを感じることもあると思います。ある人はこう言われるかもしれません。あなたは私の経験している苦しみをわかっていない。どれほど長い間私はこの問題と戦ってきたことか、誰だって今の私のような状況に置かれれば喜ぶことなどできないと。予期していなかったような深刻な病を患ったら、人間関係がこじれ、ひどい扱いを受けたら、期待していた、また思い描いていたことが裏切られ、崩れ去ってしまったら、私たちの心はざわついてしまったり、私たちの心から喜びを奪い去ってしまうようなことが私たちの周りにはたくさんあふれています。では一体どうすればそんな困難が数多くある中であって、私たちは喜びを失うことなく歩み続けることができるのでしょうか？感謝なことに聖書はその答えもはっきりと私たちに教えてくれています。

3) 主を知っていること 3節

3節に「知れ。主こそ神。主が、私たちに造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。」とあります。どんな時も揺り動かされることなく、喜びを持って主に礼拝を捧げるのに必要なことは主を知ることです。3節の初めに「知れ」と書いてありました。私たちが苦しみの中にある時、私たちに支えてくれるものは揺るぐことのない神のみことばです。みことばを通して私たちが主を個人的に知り、主がどのようなお方なのか、主が私たちにどんな約束を与えてくださっているのか、その真理をいつも思い巡らせること、それこそが私たちが喜び続ける上で最も大切なことです。だからこそ私たちが礼拝する時には、主をほめたたえたいという熱意や喜びといった感情ももちろん必要になりますが、同時にみことば、聖書の教えというものが絶対に欠かすことができないのです。イエス様もヨハネ4：23-24で「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのように人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」とされていました。ただ単に感情にだけ訴えかける礼拝は確かに心が躍り、主への思いが高まり、その場は喜ぶかもしれませんが、しかし、試練が来れば、さまざまなものに振り回され、失望を覚えてしまうのです。私たちの信仰はそんな不安定なものに根差すのではなく、決して揺るぐことのないみことばの上に根差すことです。このみことばを通して私たちがますます主を知ること、そしてそのことを通して主を喜び、愛する礼拝者として私たちは変わり続けていくことができるのです。

◎ いつも覚えるべき主の二つのご性質

また特に、3節では大きく二つの神様のご性質について、著者は「知れ」と書いていました。こんな神を「知れ」と。私たちが悲しみや恐れに心を支配される時に、どんな主を私たちが覚えておくべきなのか、どんな主を知っているから私たちは変わらずに喜ぶことができるのか――。

a) 主が創造主なる神であること 3a節

私たちが覚えておくべき一つ目の主のご性質は、主が創造主なる神であることです。3節に「**知れ。主こそ神。主が、私たちが造られた。**」と書いていました。私たちは神様によって造られた存在だとみことばははっきりと教えています。言い換えれば、私たちは突然進化してこの世に生まれて来たような存在ではないということです。私たちがこのようにして今を生きているのは、決して偶然の産物ではありません。神様が目的を持ってひとりひとりを特別に造り、今この場に置いてくださっているのです。そして神様は私たちが造ってくださっただけでなく、世界を造られた力ある主が今もすべてのことを支配しておられ、この地上に起こるすべてのことをご自分の意のままに支配されておられる。だからたとえ苦しいことがあったとしても私たちが覚えておくべきことは、私たちに起こっているすべてのことは神様の御手のうちに起きているということです。私たちに理解できないことがあったとしても、神様はそれさえもすべて支配されているということです。神が私たちが造り、私たちがいつも導いてくださっている。だからこそ私たちはこの主に喜びの賛美を捧げるのです。この方に感謝の賛美を捧げるのです。私の主はすべてを、何より私自身をご自分の計画にのっとって造ってくださったすばらしいお方だ。今生かされているのも今置かれている状況も何一つ偶然のものではなく、すべてが神様の御手のうちに起こっている。だから私はそんな方に喜んで仕えて行こうと。

b) 主が私たちの羊飼いであること 3b節

また、私たちが覚えるべき主のご性質は主が創造主なる神であるということだけではありません。3節の続きに「**私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。**」と記されてきました。二つ目は、主が私たちの羊飼いであるということです。この世界を造られた創造主である神は、私たちが造られただけでなく、羊である私たちが養い、守り導いてくださる羊飼いなのだとみことばが教えてくれています。羊にとって羊飼いというのはなくてはならない存在です。羊は弱くて臆病なゆえに自分の力で生きていくことはできません。しかし、そんな羊の弱さをわかっている羊飼いは彼らを十分に養うために、どこに豊かな牧草地があるか、どこに行けば安全な水飲み場があるかをよく知っています。またか弱い羊たちを守るために羊飼いたちはいつも彼らのそばにいて歩み、危険や敵から羊たちを守ってくれるのです。羊は羊飼いがそんな存在なのだということをよく知っています。だからこそ彼らは羊飼いの声によく聞き従い、その守りのうちに安心を抱くことができるのです。聖書が教えることは、世界を造って世界を支配されている神が私たちの羊飼いだということです。私たちの弱さも私たちの必要も、私たちの心のうちもすべて私たち以上に知っていてくださる神が羊飼いとして私たちとともに歩んでくださるのです。

だとすれば、私たちの心は喜びに満ちあふれないでしょうか？主が私たちといつもともにいて、辛い時も悲しい時も私を導いてくださる。今置かれている状況は自分にとって辛いものだし、私には先のことは一切わからない。でもそのすべての先をご存じの、どこに導かれているのかも知っていて、どこに導く力も持っている神が、そんな主が私たちとともに歩んでくださる。だから私はこの主にすべてを委ねて歩んで行こうと。そして、新約の時代を生きる私たちにとって最もすばらしい喜びの知らせは、羊飼いであるイエス・キリストが羊である私たちのためにご自分のいのちを犠牲にしてくださいましたということです。皆さんもよく知っている I ペテロ 2 : 22-25 で「**キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。**」と書いています。羊飼いである主イエスは、私たちの最も大きな問題である罪の問題を解決するために、ご自分は一切罪を犯していないにもかかわらず、みずから進んで十字架に架かってくださいました。神様に逆らい、本来私たちが受けるべき罪の罰をかわりに背負って、あの十字架の上で苦しんでくださったのです。そしてその大きな犠牲の上に救いのみわざは完成されました。私たちのうちにそれに値するすぐれたものがあつたのでも、私たちが神の前に何か良いことをしたからでもなく、ただ一方的に主が私たちのことを愛し、私たちのためにいのちを捨ててくださったのです。このような形で愛を示してくださった羊飼いである主がきょう私たちとともにいてくださる。これは私たちの心にあふれんばかりの喜びをもたらすものではないでしょうか？主に喜びの声をあげ、どんな時もこの主にあって喜びに満ちた礼拝を捧げる礼拝者として生きて行く鍵は主を知っていることです。

では、今あなたはこのイエス・キリストを知っているでしょうか？知るといえるのは単なる知識の話をしているではありません。あなた自身の王として、また主としてこの方を知っているでしょうか？あなたの罪のために死に、あなたの罪のためにいのちを捨ててくださった主を自分の救い主として受け入れ、この方を信じて歩んでいるでしょうか？この方を知り、自分のためにみずからのいのちを捨ててくださった、そんな犠牲をもって愛を示してくださったこの方のためにすべてを捧げて生きて行きたいと今望んでいるでしょうか？

聖書の神は必ず罪を正しくさばかれるお方です。必ず悪や間違いを正される日がやって来ます、しかし自分の罪を認め、それを悔い改めて赦しを求めて神の前に出て来る者には必ず赦しを与えてくださると約束して下さったのもこのあわれみ深い神です。もし今まだ主を知らないのであれば、このイエス・キリストを知らないのであれば、どうかきょうこの救いをよく知ってから帰ってください。主を愛し、この主のために生きておられる皆さん、私たちはこの主をどんな時も覚えて歩むことができているでしょうか？ご自分の血でもって私たちを買い取り、新しく神の子どもとして歩むことをよしとてくださったその主を私たちはいつも心にとめて生きていますでしょうか？私たちはすぐに周りの状況に目を取られて心が揺らいでしまうことがあります。もしそんなことを経験することがあれば、いつも主が誰なのかを思い起こすことです。そしてもし何も喜べるものがないと感じることがあったとすれば、主があなたのために犠牲を払ってくださった十字架を覚えることです。王であり、創造主であり、主権者であり、羊飼いである神がともにいてくださっている。このみことばに根差す時に、私たちのうちには喜びがあふれてこないでしょうか？私はこの神を知っているのだ、それが私たちの喜びの源です。その喜びをもって、主に心からの礼拝を捧げる者として私たちは生きて行くことです。

2. 感謝にあふれた礼拝者 4-5節

1) 心からの感謝を主に捧げる 4節

さて、ここまで私たちは喜びにあふれた礼拝者の姿について学んできました。残りの時間は、二つ目の感謝にあふれた礼拝者の姿をともに見ていきましょう。4節を見てください。「感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。」と書かれていました。私たち主を知っている者の責任は心からの感謝を主に捧げることです。主はこの世界のすべてのものを創造されたまことの神で、この力ある主はちっぽけで無力な私たちにあわれみを注ぎ続けてくださっている。このあわれみの主が私たちの罪のために、恵みのゆえに身代わりになって死んでくださった。こんな主が私たちとともにいて、私たちの羊飼いとしてともに歩んでくださる。私たちはこれをみことばから知ったのです。だとすれば、この主のすばらしさを知った私たちの応答は進んで感謝の賛美を主に捧げる者でなくてはなりません。主を感謝します、あなたはこんな愚かでああなたの恵みに値しない、あなたの愛に値しない者に、あなたは祝福を与えてくださいました。私はそんな主に心からの賛美を捧げたい、そんなあなたの御名を私は日々ほめたたえていきたい、これこそが主を知っている者の立てるべきあかしです。

では、私たちの歩みはどうでしょうか？私たちの歩みを見た周りの人は私たちのうちに主へのあふれんばかりの感謝を見るのでしょうか？それとも私たちのうちに絶え間ない不平や不満を見るのでしょうか？私たちは普段どんな時に感謝をするのが難しく感じたり、心から感謝が失われてしまうことがあるのでしょうか？もちろん人それぞれいろいろな場面でいろいろなチャレンジを受けることがあるでしょう。これまでにも見てきたとおり、自分の手に負えないような苦しみや余りにもひどく辛い出来事に遭遇すれば、感謝することに難しさを覚えてしまうことがありますし、また誰かから裏切られたり、予期せぬ出来事で楽しみにしていたもの、計画を変更しなければならなくなれば、私たちの口から出るのは感謝よりも怒りかもしれません。これ以外にもいろいろな場面を上げることができますけれども、何よりも私たちのうちから感謝を奪い去ってしまう大きな問題の一つとして考えられるのは、私たちの持っているプライドではないでしょうか？こんなことを思ったことはないですか？自分はもっと良いもの、ふさわしいものを受けるべきだ、今受けているこんな扱いは自分には値しない。私たちはこうして時に自分の中に持っている基準に物事を当てはめて判断しようとしたり、ほかの人と見比べてしまったりすることがあります。あの人を持っている物が欲しいと願って、それを手に入れることができなければ感謝を失うだけでなく、その相手に対する妬みや嫉妬が心を支配してしまうことがあったりしますし、また自分の思ったとおりに行かなければ、ある時は口ではありがとうと言いながらも、内側では感謝が一切なかったり、またある時はその現状を神様に対して怒りとしてつぶやいているかもしれません。

この態度、この思いの裏にはどんな問題があると思いますか？それは私たちが自分をもっと多くのものに値するというプライド、もっと言えば神様ではなく自分に焦点が当たっているところに問題があるのです。もし私たちが神様の存在を忘れ、神の前に私たちがどのような存在なのかを忘れて誇り高ぶるのであれば、その思いから感謝の心は決してわき上がってくることはありません。思い出してみてください。最初に例として挙げたパウロは、どんな境遇の中にあっても満足すること、主に感謝することができました。こう言っていました。「私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」(ピリピ4：12)と。パウロは苦しみの中にいました。でも彼はその中であって満足を持つことができました。これは何も彼のうちにいろいろな状況に対応するだけの力や知恵があったのも、また彼がほかの人々よりも優れていたからでもありませんでした。なぜ彼はどんな状況にあっても

満足を持って感謝することができたのかということ、それは自分の弱さを認め、頼りとする拠り所がどこにあるかをいつも覚えていたからでした。

続いて13節で「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできる」と言います。こうして主の力に信頼していたからこそ、こうして主を知っていたからこそ、彼はこの主が与えてくださるものに感謝し、どんな境遇にあっても満足することができました。喜ぶことも感謝することも鍵は私たちがどれだけ主を知っているかです。どれだけ私たちが主に心をとめ、みことばに心を支配させて歩み続けているかどうかです。神がどのようなお方かを知っていることこそが私たちの信仰の歩みに確信を与えてくれます。

2) 主はいつくしみ深く 5節

だからこそ最後5節を見てください。残念ながら日本語の聖書には訳されていませんけれども、実を言うと、5節は“なぜなら”という接続詞で始まっています。“なぜなら”「主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。」と。4節で神様に感謝を捧げることを記したこの詩篇の著者は、最後にどうして私たちが主に感謝を捧げるべきなのか、その理由を教えてください。これはこれまで見てきたことと全く同じです。主が一体どのようなお方なのかを覚えることです。5節の最初に主は慈しみ深いお方だとありました。別のことばで言えば、この主はご自分の性質、またなされるすべてのことにおいて良い、すばらしいことをなされるお方、良いお方、すばらしいお方ということです。主がいつも変わらずに良いお方でいてくださること、どんな時も最善をなされるお方であること、またこの方のなされることがいつも私たちの想像をはるかに超えてすばらしい、いつくしみの神であるからこそ私たちはこの主に賛美を、感謝を捧げるのです。ダビデもこの「いつくしみ深く」ということばと同じことばを用いて、主のすばらしさを詩篇34：8で「主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。」と表現しています。ダビデはよくわかっていました。主は本当にすばらしいお方なのだ、こんな方に身を委ねて歩めることはなんて幸いなことなのだろうと。主はいつくしみ深い。だから私たちはこの主をほめたたえるのです。

3) 主の恵みはとこしえまで 5節

また次に、主の「恵みはとこしえまで」とあります。なぜ私たちは主に感謝を捧げるのか、それはこの主の愛とあわれみがいつまでも変わることはないものだからです。この世の愛は感情やその場の状況に左右されるものです。愛したい人には愛を示すけれども、愛せない人には愛を示さない。同じように私たちが時に互いの間で愛すること、互いの間で赦し合うことに難しさを覚えてしまうことがあります。もし神の愛が私たちと同じように変わってしまうものであったとすればどうだったでしょう。確実に言えることは、主の愛に値しない私たちは皆地獄で罰を受けるということです。しかし、この主の恵み、主のあわれみ深さはいつもどんな時代にあっても変わることがなく、神の愛はいつも私たちとともにあって守り導いてくださる。私たちには理解できないような苦しみを味わうことがあったとしても、これらすべてを支配してくださるあわれみ深い神が必ずその状況さえも私たちにとって益としてくださると。主がそんな恵み深いお方であること、恵みに富んだお方であるからこそ私たちはこの主に賛美を捧げるのです。

4) 主の真実は代々に至る 5節

そして最後に主の「真実は代々に至る」とあります。主はそのご性質においても、またことばや約束においても、どんな時も正しくいつまでも変わることはありません。主が約束してくださったことは、必ず成し遂げられるのです。だからこそ私たちは今主のあわれみを見ることができなかつたとしても、そんな状況に置かれていたとしても、自分にとって益になるとは到底思えないような状況に置かれたとしても、主に信頼して歩むことができるのです。今私は先が見えなくて心配で、不安で心が覆われてしまいそうだ。でも私の主は私にマタイ28：20で「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」と、こんな約束を与えてくださっている。変わらない主が、必ず約束を守られる主がこんな約束を私に与えてくださっている。だから恐れに心を支配させるのではなく、主の変わらない誠実さに心をとめて歩んで行こう。主がこうして誠実でいつも正しいお方であるからこそ、私たちはこの主をほめたたえるのです。主がいつくしみ深い方だから、主が恵み深くあわれみ深いお方だから、主がどんな時も誠実で変わらないお方だから、私たちはこの主を賛美するのです。それこそが私たちの最もふさわしい応答だということです。

さて、きょうは心からの喜びと感謝をもって神様に礼拝を捧げる、そんな礼拝者として生きて行くことがどのようなことかを改めて見ました。皆さんの歩みはどんな状況にあっても揺るぐことなく、主を覚え、主のうちに確信を見出して生きる歩みだったでしょうか？一日にして自分の愛する家族も、持てる財産も何もかも失ったヨブも、敵に悩み苦しめられ、死を覚悟するほどの困難の中にあつたダビデも、誰よりも迫害に遭い、キリストの福音のために多くの試練に直面したパウロも、彼らは状況に心を

支配させるのではなく、その状況さえ支配されている神に目を向け、この方に信頼して歩いていました。だからこそ彼らは一見喜ぶことのできないような状況の中でさえ主にあって喜び感謝する礼拝者として生きることができていたのです。

鍵は自分の愛する主を知っていることです。兄弟姉妹の皆さん、私たちも彼らと同じように生きていくことができます。私たちもこのようにしてみことばが与えられ、みことばを通して主を知ることができ、そしてこの方をいつも覚えて歩むのであれば、私たちにはこの世が決して与えることのできない喜びと感謝を主が与えてくださる。こうして私たちは喜びと感謝にあふれた礼拝者として生きて行くことができます。だからこそ続けてともにこのみことばを学び、そして主を知り、このすばらしい神に心からの喜びと感謝の礼拝を捧げる者として成長していきましょう。